

二人の師



4

安藤由紀子

忠敬の天文学の師、高橋至時は大坂の貧しい同心、間重富は十一軒も店を持つ質屋で、共に麻田剛立(注1)の高弟であった。

「寛政の改革」の立役者、老中松平定信に抜てきされた若年寄堀田撰津守正教は、幕府の威信をかけて、間違っただけの暦を改めるため、民間から麻田を招請した。しかし、麻田は老齢のため二人の高弟、至時と重富が推薦され、「寛政の改暦」を行う天文方

り、当時まだ公家がわずかの干渉権を持っていた。先例により京都でも大測を行い、宣下(注2)という形をとらなければならなかった。このため至時は江戸で準備を終えてすぐ上京し、留守中の忠敬の教育は重富に任ざられていた。

寛政十二年(一八〇〇年)、忠敬が最初の蝦夷測量から帰ったことを報告した至時書簡は、珍しく興奮した語り口で「伊能忠敬。一人も病人無くまったく幸せな男です。江戸から四百二、三十里、少しも残さず悲数を記し、方位・高山も測ってきました。指図はしましたが、これほど完べきにやるとは思っていませんでした」と書いています。



父の父、桑原隆朝の入れ知恵かもしれない。

「伊能図」へと注がれた「寛政の改暦」への情熱

へ乗り込んで来ることになった。麻田流天文暦学は画期的な学問的水準を持っており、「解体新書」翻訳の意義をしのぐものがあった。この二人に忠敬が出会って、はじめて「伊能図」は生まれたのである。

成(後編(注3))ゆっくりとできが理解できるようになり、月食観測もやります」とあり、二年後至時が江戸に帰り、重富が大坂勤務になってからの至時書簡には「伊能は休調をくすした出、久しく参りません。例によって観測のやりすぎでしょう」とか「月食についての伊能の観測値は私の値に近かったのですが、まだ未熟な

重富は質屋で付き合ひも広く人間理解の幅の厚い人であった。測器の改良に独創的で、忠敬が用いたものも多くは重富の考案による。

忠敬は身分的には百姓であったため、全国に通用する通行手形(幕府発行の先触れ)を出すのは、前例のないことであった。忠敬は佐原村民の滞在費まで自分持ちで「箱訴」を計画した。公儀から名字帯刀を許してもらうため、佐原の村民に伊能忠敬の善行を訴えさせたのである。二番目の妻)

改暦権は国の支配権の象徴であ

重富は人をよくほめる人であった。後には「伊能は地図の師」「伊能先生」等と書くようになった。

忠敬は身分的には百姓であったため、全国に通用する通行手形(幕府発行の先触れ)を出すのは、前例のないことであった。忠敬は佐原村民の滞在費まで自分持ちで「箱訴」を計画した。公儀から名字帯刀を許してもらうため、佐原の村民に伊能忠敬の善行を訴えさせたのである。二番目の妻)

二人の師は迷信大嫌い人間であったが、理屈を見て凶年の印かといひ合わせてきた佐原の親類に、忠敬は「地球全体の天なのだから凶年なら地球全部ということになる。心配ご無用」と返事を出した。ほほ笑ましいトリオぶりであった。

忠敬の善行そのものは事実であるが、重富はその背景を知らない。「学問にたけた上、名主の鑑でもある」と絶賛して惜しまなかった。行政の末端にいた忠敬の方がしたたかであった。

伊能忠敬あての高橋至時書簡(伊能忠敬記念館所蔵)。至時が考案し距離を測定する量程車の誤差などについて書かれている



御用

改暦権は国の支配権の象徴であ

重富は人をよくほめる人であった。後には「伊能は地図の師」「伊能先生」等と書くようになった。

忠敬は身分的には百姓であったため、全国に通用する通行手形(幕府発行の先触れ)を出すのは、前例のないことであった。忠敬は佐原村民の滞在費まで自分持ちで「箱訴」を計画した。公儀から名字帯刀を許してもらうため、佐原の村民に伊能忠敬の善行を訴えさせたのである。二番目の妻)

二人の師は迷信大嫌い人間であったが、理屈を見て凶年の印かといひ合わせてきた佐原の親類に、忠敬は「地球全体の天なのだから凶年なら地球全部ということになる。心配ご無用」と返事を出した。ほほ笑ましいトリオぶりであった。

(注1)1734-1799、江戸中期の天文暦学者。(注2)天皇の命を伝える文書を下すこと。(注3)天文暦学では当時最高の教科書